

音は語る

文 藤盛一朗



連載 43

「夜は明けるのか」という問い ブロムシュテットの示した光

戦争によるいのちの破壊が進む。希望はないのかと問えば、光は存在す



ショスタコーヴィチの交響曲第8番を演奏する
ビシュコフ指揮者チェコ・フィル © Naoya Ikegami

る。この10月は、そのように思われるような優れた音楽表現が続いた。まずは、チェコ・フィルが来日公演で演奏したショスタコーヴィチの交響曲第8番（10月22日、サントリールホール）。首席指揮者・音楽監督のビシュコフがとったテンポは総じて遅く、1943年に作曲された作品の持つ重苦しさがいやおうなしに増した。凍りつく冷たさと、人のぬくもりを同時に感じさせる第1楽章の弦楽器群や、コールアングレのソロが聴かせる深い歌は、この楽団ならではのと感じさせる。

それにしてもなぜ、チェコ・フィルがショスタコーヴィチなのか。1968年の民主化の際、ソ連軍を中心としたワルシャワ条約機構軍の戦車に蹂躪されたチェコの人々には、ソ連やロ

シアに忌避感があるイメージがある。だが、レニングラード（サンクトペテルブルク）生まれで、1975年に米国に移住したビシュコフは、本誌10月号掲載のインタビュでチェコ事件と呼ばれるこの侵攻に言及し、「チェコ・フィルにはショスタコーヴィチは決して異質なものではない」「戦時中のソ連の市民と似たような体験をしたので、この音楽を深いところで理解しているのです」と語っている。

多義的にとれる不協和音 終結で響いた疑問の「レ」

第3楽章から第4楽章への移行行きで、身震いする。フォルテ三つのティンパニのロールに続き、すさまじい不協和音が爆発する。この音は、多義的に解釈される。1943年の時点でのショスタコーヴィチにとっては、戦争という究極の暴力の表現だったかもしれない。原爆を生み出し、市民に投下する人間の姿であるかもしれない。あるいは今、どんなに理不尽で正義にも国際法にも反していないながら、武力の行使を続ける権力者の姿と重ね合わせられるかもしれない。この不協和音は、明るくなった第5楽章でも再び立ち現れる。

全曲の終結部は、浄化ととれる。ハ長調で消えゆくように結ばれるが、ビシュコフとチェコ・フィルの表現は、

ストロが世界の今に語りかける特別な「言葉」と感じられた。

シベリウスの5番は、冒頭から、特別な空気が醸し出された（10月9日、サントリールホール）。フィンランドの森の沼地。ホルンは、早春の陽光だろう。続く木管の調べは、すぐさま白鳥を連想させる。温かなその響きは、16羽の白鳥が自分の上を旋回し、「きらめく銀のリボンのように太陽のもやの中に消えていった」時の作曲者の

幸福を予感させる。シベリウスは、その時のことを「人生最高の体験」とつぶっている。

第1楽章の楽想の高まりを、ブロムシュテットはことさらに強調するのではない。賛美と感謝があふれ出るようであり、その温かさは聴く者の心に伝わる。

交響曲第5番が作曲され、改訂を経て最終稿が完成するまでの1914〜19年は、第一次世界大戦やロシア

革命と重なっている。

白鳥たちが連なって飛ぶさまを思わせる第3楽章（終楽章）は、本来は世界がそうであるべき幸福を表すのだろうと感じられる。ブロムシュテットは、柔らかな右手を動かし、大らかな世界を築いていく。まさに聖なる響きと感じられ、最後の六つの和音の強奏も、温かみを失わない。

メンデルスゾーンの《讃歌》はまず、管弦楽のみの長大な第1曲「シンフォニア」の生気あふれる演奏に耳を奪われる



《讃歌》を指揮するブロムシュテット（提供：NHK交響楽団）



日本フィル定期で、ショスタコーヴィチの交響曲第11番第4楽章「警鐘」の終結で用いられた教会風の鐘（提供：日本フィル、ゲネプロ時に撮影）

単なるハッピーエンドではなかった。普通なら経過音として気にならないコントラバスのレ音が、疑問をさしはさむかのように響く。だが、そのコントラバスも、最後はドを奏でる。ビシュコフはこの終結について「平和がいつか訪れる夢ではと考えています」と語っている。

崩壊してなおうごめく権力者 教会風の鐘からは平和の祈り

日本フィルは、首席指揮者カーチュン・ウオンの指揮でショスタコーヴィチの交響曲第11番《1905年》を

（10月18日、NHKホール）。コンサート指示通り、テンポに自在感があり、実に流れがよい。そして闇の中の悲嘆の涙が歌われる第3曲の向こうに、信仰者のメンデルスゾーンとブロムシュテットは、神を見ている。初演は、バッハの聖地、ライプツィヒのトーマス教会。バッハの《マタイ受難曲》と同じく、《讃歌》の作曲と演奏には礼拝の面があったことがうかがえる。

楽曲の詩は、旧約聖書の詩篇やイザヤ書、新約聖書のパウロの書簡を一部を変えて編まれている。第6曲では「私たちは闇の中で叫んだ見張りの人よ、夜はもうすぐ明けるのか」という問いと、「朝は来る。だが、まだ夜だ」という答えのやり取りとなる。そして「夜は過ぎ去った」とソプラノが歌い、第7曲「闇の行いを脱ぎ捨て、光の武具を身につけよう」の讃歌、そして、「夜と闇を光と曙から分けられた主に感謝せよ」という第8曲のしみじみした讃美歌へと続いていた。

ブロムシュテットが自伝で語った言葉を思い起こす。「音楽は崇高なるものの子感を伝える」。ブロムシュテットは、バッハを模範に、「自らを誇示するのではなく、神に従う」信条を語っている。奇跡的ともいえる指揮活動は、そこに拠る所がある。そして聴く者の心に、温かな希望の光を灯し続けている。

白鳥飛行の聖なる響き
「崇高なるもの予感」

続くコールアングレのソロは心に

沁み、最後の「警鐘」は、教会風の鐘で鳴らされた。表題の警鐘の原意に照らせば、同じ月の都響の演奏のような、鋭く、金属的な響きがふさわしい。だが、温かみを帯びた音によって、最後はくしくも平和の祈りとなった。

三つのプログラムで各2日間からなるNHK交響楽団の定期公演を指揮したのは、ブロムシュテットである。中でもシベリウスの交響曲第5番と、メンデルスゾーンの交響曲第2番《讃歌》は、第二次世界大戦や東西冷戦といった時代を生きてきた98歳のマエ